

明日の 東洋学

Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)
Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo



イスラーム陶器史研究におけるデータ収集
榎屋 友子

絨毯研究の方法と今後の可能性

鎌田 由美子

イスラーム陶器史研究におけるデータ収集

梶屋 友子

はじめに

日常的に使用されるやきものの器。器形はその用途を暗示しているし、彩画はそれを使う人々や地域、時代の好みを反映している。器を飾る技法や釉薬、胎土を調べれば、それを作った陶工がどのような技術をもっていたかを端的に理解することができる。しかし、ある器がいつ、どこで作られたかという、器に関する最も根源的な問いには、何を参考にすればよいだろうか。現代の作品であれば、陶工または陶器工房の名前や生産国が記されていたり、流通の経路などがきちんと追跡できたりするため、より容易に把握することができる。骨董品の器の場合、それがいつどこで作られたものなのかを言い当てる目利きは、それまでに実見したいろいろなタイプの器の技法、釉薬と胎土の色、彩画様式、器形などを頭の中にインプットして、それに基づき判断する。

陶器史においては、まずは、あるタイプの陶器がある場所で作られたという証拠を確立しなければならない。器のかけらが発掘によって出土しても、それはそのタイプの器が発掘された層の時点でそこにあった、そこで使われたということしか示しておらず、そこで作られたことを意味しない。ある場所で陶器が作られたことを確立するためには、窯の発掘かウェイスターの出土が必要である。窯は陶器を焼成させる設備であり、陶器工房が存在したことの動かせない証拠となる。ウェイスターは、陶器を焼くときにできてしまう焼成不良品で、異なった個体が接着して焼き上がってしまったり、焼成の際に器が変形してしまったり、釉薬の色が何らかの理由で陶工の思ったとおりに発色しなかったりしており、商品としての価値がないため、廃棄されたものである。商品として流通することがないので別の都市に移動することがなく、ウェイスターが見つければそこで陶器が生産されたことを意味する。そのほかに、稀な例として、陶器そのものに陶工の名前、年記、制作の場所が書き込まれていることがある。

しかし、残念ながら、イスラーム陶器においてはこのような証拠をもつ陶器タイプは極めて少ないのが現状である。いつどこで作られたかはっきりわかる基準作の釉薬や胎土を化学分析し、その組成を明らかにすることができれば、値の相似する陶器の制作地や年代を特定することもできようが、そもそもの基準作が少ないので、化学分析の恩恵に浴することがなかなかできない。それにもかかわらず、世界の美術館にはたくさんのイスラーム陶器が保存され、

展示品として鑑賞に供されている。せめて、それらが考古学的に出土したものであれば、少なくとも年代的な手がかりは得られるが、多くの作品は来歴が明らかではないし、現代の補修を受けて過去の正しい姿を伝えていないこともある。そういった中でも、現代まで遺物として生き延びることができたイスラームの陶芸作品についての知識を増やし、その魅力を多くの人々と共有するには、個々の陶器の年代や地域をある程度まで位置づけ、制作の背景を少しでも探っていかなければならない。そのためには、さまざまな角度での考察を行い、共通点を持つ作品を集め、データを積み重ねていくしかないのである。東洋学研究情報センターの機関推進プロジェクト「イスラーム美術・建築作品の画像・情報アーカイブ」の一環として、筆者の研究室がこれまでにおこなってきたイスラーム陶器に関するデータ収集の概要について、本稿は概説することとする。

1. イラン製タイルのデータ

イラン中部の都市カーシャーンは、ペルシア語の「タイル」という言葉「カーシー」の語源ともなった製陶都市であり、陶工がいくつかの陶器に自らがカーシャーン出身であることを示す「アル=カーシャニー」という署名や「カーシャーンで制作した」という銘文を書き込んでいる。史料からも製陶の事実が裏付けられている希少な例である。しかしながら、カーシャーンからは未だ窯跡は発見されていない。カーシャーン産、カーシャーン出身の陶工の作品であることが確実な陶器の彩画様式やアラビア語・ペルシア語銘文の表記法や内容の特徴、彩画技法における特徴を基にし、さらに書き込まれた年記によって12世紀後半から14世紀中ばまでに年代設定できるカーシャーン関連の陶器群を抽出できる。

カーシャーン陶器にも多様な器形があるが、筆者が特に関心をもっているのは、タイルである。タイルとは建築の内装・外装として用いられる陶器製の板のことである。たくさんのタイルが組み合わせられて壁を覆うことにより建築の表面を装飾する。釉薬を施すことによって生まれる滑らかで多彩の美しい表面を建築に与えることができ、これがイスラーム建築の特徴の一つともなっている。

12～14世紀のタイルは使用される部位によって形や装飾デザインが異なる。壁面下部の腰羽目部分で組み合わせられてパネルを構成する、いろいろな幾何学図形の形をもつ腰羽目タイル、腰羽目の上で水平に並べられてフリーズ(帯)を形成する、正方形または長方形のフリーズ・タイル、宗

教建築の場合のみに使用される、メッカへの礼拝の方向を指し示す壁龕(「ミフラブ」と呼ばれる)の浮彫が施された大型タイルの組み合わせであるミフラブ・タイルなどである。当然のことながら、同一の平面を飾るタイルは技法、形や色彩、型押し浮彫デザイン、彩画デザイン、銘文内容などにおいて類似する特徴をもつ。

19世紀後半になってイラン圏のタイルへの関心が世界的に高まると、急速に良好な状態のタイル作品が古美術市場に大量に出回った。これらはその時点まである程度の保存状態を保っていた遺構から拾われたり、はがされたりしたものであろうと考えられる。イランに限らず、当時はまだ7世紀以降のイスラーム時代の建築遺跡を組織的・学術的に発掘する動きはなく、イスラーム時代の遺物の保存に対する意識も低かったため、このような蛮行が横行しえたのである。その結果、出自のわからないタイルが世界中のさまざまなコレクションにばらばらに分蔵されることとなった。

タイルがはがされてしまったことで、かつてどの建築物を飾っていたのかはもちろんのこと、どのタイルとどのタイルが同じ平面装飾に属していたのか、どのように配置されていたのか、銘文をもっている場合ではどのような内容の銘文を構成していたのかは全くわからなくなってしまった。それらを明らかにするために、丹念にタイルの画像、寸法、装飾技法、胎土(生地)のタイプ、浮彫型のデザイン、銘文内容等々のデータを蓄積していき、互いに比較してグループ分けしていくという地道な作業が必要となってくる。タイルはデータとして注目すべき項目が多数あり、他の器形の陶器よりもグループ分けしやすいため、グループのうちの1枚でも年記が書き込まれていると編年(制作

年順に作品を並べていくこと)が可能になる。これにより、カーシャーン陶器の様式発展の様子を仔細に追っていくことができる。

現在までに世界12カ国、数千点にのぼるデータを収集している。まだまだ未収集のデータは多いと思われるが、今後はデータを丹念に解析し、情報を抽出していく段階に進みたいと考えている。直接実在する(あるいは、実在した)建築物と結びつけることはかなわないかもしれないが、建築物の用途や種類、建築物とタイルを制作した陶工たちとの関係に迫ることができるのではないかと期待している。

2. 大原美術館フーケ・コレクション陶片のデータ

岡山県倉敷市の大原美術館に所蔵されているフーケ・コレクションは、1922年にパリ滞在中の画家児島虎次郎(1881-1929)が大原美術館のためにエジプト関連の古美術を専門に扱うアルメニア人古物商カレブジアン兄弟から購入した、フランス人医師ダニエル・マリー・フーケ博士(1850-1914または1921)収集の400点以上もの陶器片である。現在、その一部が大原美術館の別館である児島虎次郎記念館オリエント室に展示されている。

フーケは1881年よりカイロに滞在し、博物館主催のミイラの解剖を筆頭医師として行うなどエジプトの古美術に深い関心をもっていた医者で、1884年からは自らもエジプト古美術を集め始めたが、さらに1886～87年の冬以来、彼は旧カイロの瓦礫の山の中からたくさんの陶器片を集めるようになった。児島虎次郎はフーケの残した陶片群の中から大原美術館所蔵にふさわしいと思われる400点ばかりを選別したのである。

フーケが陶片採集を行った旧カイロとはフスタートのこ



図1 イラン北西部タフテ・ソレイマーン出土のイル・ハーン朝時代(13世紀)のタイル(テヘラン、中央宝物庫所蔵)

とで、642年にイスラム軍がエジプトに建設した最初の都であり、現在のカイロ市の中で最も古い地域である。しかしながら、12世紀半ばにおける火災と14世紀半ばにおける黒死病の流行を経てほとんど人が住まないゴミ捨て場と化し、19世紀まで瓦礫のまま残っていた。20世紀初頭に大規模な発掘が行われ、その後も早稲田大学や中近東文化センターによる発掘調査も含め、今日まで多数の調査がなされている。フーケがフスタートに注目し、陶片採集を行ったのは全ての調査の中で最も早い時期と考えられる。早くも1900年にフーケは自分のコレクションの陶片のうち、14～15世紀のマムルーク朝時代の作品と思われるものを抽出して論文を発表しており、これが現在においてもなおマムルーク朝陶器の基本書となっている。

フーケがフスタートで陶片採集を行った時代は、上記のカーシャーン陶器への関心がヨーロッパで拡大しつつあったところであるが、エジプトにおいてはまだ古代エジプトへの関心が主流でイスラム時代の陶器については関心が薄かった。イスラム時代の、それも完品ではなく陶片ばかりが散らばっている見捨てられたフスタートの瓦礫で、フーケは陶片を拾い放題だったはずである。フーケ・コレクションの陶片を見ると（それはさらに画家としての児島のフィルターも通しているが）、フーケの採集方針が浮かび上がってくる。大きな陶片、人物や動物の絵が描かれているもの、銘文が入っているもの、マムルーク朝の官僚の紋章が入っているもの、その他魅力的な装飾が施されているもの、である。わずかながら中国磁器も含まれ、東西文化交流の貴重な証言であり大変興味深い陶片である。いずれにせよ、ごく初期の採集なので、陶片とはいえ、大きな破片が多く、注目できるような上手な彩画をもつものが選ば



図2 フーケ・コレクションのマムルーク朝時代（14世紀）の陶器片（倉敷市、大原美術館所蔵） 撮影：神田 惟

れており、陶器作品としても大変優れたものと言える。

大原美術館から寛大なご許可を頂き、昨年度から数次にわたってすべての陶片を調査させていただいた。それぞれの陶片の画像、寸法、装飾技法、釉薬や彩画の色彩、胎土色等についてデータを蓄積した。完品ではなく、陶片であるために断面を観察することができ、通常は釉薬や経年の汚れによってはっきりとは見ることができない胎土の色を観察することも可能となった。胎土の色は、その陶器が自然の粘土を使っているか、人工的に合成した粘土を使っているかの判断に用いられるので、陶工の技術を知る上でも大変貴重なデータである。また、断面の拡大図を撮影することができ、装飾技法について興味深い事実を見いだすことができた。

調査の結果についてはまだまだ解析には至っていないが、大きく、11～12世紀のファーティマ朝時代エジプトの陶器と14～15世紀のマムルーク朝時代エジプトの陶器に分けられ、そのほかに西はスペインから東は中国までの輸入陶器が含まれる。

ファーティマ朝時代の作品としては、釉薬をかけて一度焼成させた表面の上に彩画が行われる釉上彩の技法で、その彩画が金属的な輝きを持つ、ラスター彩陶器が主流で、生き生きとした動物を描いた作品が数多く存在し、ラスター彩の輝きもよく残っている。彫刻または線刻の施された人工胎土の器に透明釉の施された作品もあり、その丁寧な仕上げは驚くほどである。

マムルーク朝時代の作品はいずれも釉薬の下に着彩が施される釉下彩陶器で、大きく2種類に分けられる。最も多いタイプである、主に銘文と紋章を図柄とする線刻文の陶器は、赤い胎土が白っぽいスリップ（化粧土）で覆われ、線刻によって描かれた図柄に多色のスリップで着彩され、その上に有色で透明な釉薬が施されている。断面図を見ると、スリップ層は厚いのに釉薬は非常に薄く、その結果釉薬とスリップの層が胎土から剥離しやすくなっており、現在では損傷の激しい個体も多い。紋章と銘文ばかりでなく、動物表現もかなり多く含まれている点は、このタイプの陶器についての現在までの認識を覆す新事実である。また、ウェイスターも数点見られる。

もう一つは人工胎土に藍色で着彩が施され、無色透明釉がかけられた、一見すると中国の染付を思わせる色調の陶器である。しかし、フーケ・コレクションに含まれた陶器は独自の鳥や植物の彩画モチーフを有しているものもあり、染付の模倣を脱したユニークな作品と言える。高台の



図3 フーケ・コレクションのマムルーク朝時代（14世紀）の陶器片の断面拡大図（倉敷市、大原美術館所蔵）

内側に陶工の署名が入っている個体が多く、研究のしがいのあるタイプである。

おおまかにファーティマ朝、マムルーク朝と分けたタイプについても、実際にエジプトの作品なのか、異なったタイプの陶器制作を分けるのは時代なのか、工房なのか、など今後検証していくべき問題点は山積している。彩画様式、銘文、紋章などのデータを詳しく整理して分析し、何らかの道筋をつけることができれば、と思っている。とくにマムルーク朝時代の陶器については詳しい研究が少ないので、なるべく多くのデータを呈示し、分類したい。

フスタートは長い間ゴミ捨て場となっていたため、建築物がなく、きちんとした地層を成していない。フーケが表面採集しただけでも、イスラム初期あるいはそれ以前の遺物もファーティマ朝の陶器もマムルーク朝の陶器も雑多に入り交じっていたという状況である。したがって、個々の陶器の制作年代についての手がかりはほとんどないと言ってもよい。さらに、著者が今まで全く出会ったことのない技法を示す陶片もいくつか含まれている。どこでいつ作られたか、今の時点では皆目見当もつかないタイプの陶器であるが、それでもそのような陶器がフスタートに存在していたという事実を明らかにすることは有用である。フスタートという場所に集められたいろいろな陶器の断片そのものから何らかの情報を引き出すことができるのではないかと希望の下に、丹念にデータを分析し、世界のイスラム陶器研究者の意見を仰ぐべく、紹介していければと考えている。世界の美術館に保存されている出自の明らかでない陶器に比べると、これらの陶器はフスタートにかつて存在していたことがわかるだけでも、ひとつのはっきりとした情報を所有していることになるのである。



図4 フーケ・コレクションのファーティマ朝時代（12世紀）の陶器片（倉敷市、大原美術館所蔵） 撮影：神田 惟

おわりに

陶器はワレモノという必然的な性格をもっている反面、その釉薬に残された色彩は数百年、あるいは千年経った今でも変わらぬ輝きを放っている。イスラム陶器に関してわかっている確実なことは非常に少ないけれども、同じタイプの陶器に関するデータを蓄積していくことによって、それらがいつどこでどのように作られた作品であるかという糸口を見つけていくことができるだろう。現在まで残った陶器について地道で丹念なデータ収集を積み重ねておけば、今すぐすべてがわからないとしても、将来新たな着眼点や発見から一気に理解が進むこともあるかもしれない。

（東京大学東洋文化研究所教授）

絨毯研究の方法と今後の可能性

鎌田 由美子

本稿では、日本ではあまり認知されていない絨毯研究 (carpet study) について、その方法を紹介し、今後の研究の可能性について述べる。絨毯は、スペインから北アフリカ、トルコ、イラン、インド、中央アジア、中国に至る広範囲にわたって織られてきた。長い歴史のなかで連続と織られてきた絨毯には、遊牧民たちが自分たちの家具や財産として織ったものもあれば、宮廷工房で調度品あるいは外交用の贈答品として織られたものも、都市民が商品として織ったものもあった。さらに、絨毯が生産された地域の多くではイスラーム教が信奉されたため、礼拝時の敷物としての役割もあった。

絨毯は、経糸と横糸とパイルから成る単純な織物で、複雑な技術や道具を必要としないが、素材の種類や織の細かさなどによって、さまざまな品質・デザインのもので作られた。トルコ、イラン、中央アジア、インドでは特に優れた絨毯が生み出され、それらは絨毯生産の伝統のない地域の人々にとって憧れの対象となった。14世紀以降、多くのトルコ絨毯がヨーロッパにもたらされたほか、16世紀末以降には日本にもイランやインドの絨毯がもたらされた。19世紀以降には、ヨーロッパを中心に、絨毯に美術品としての価値が見出されるようになり、万国博覧会や美術館で展示されるようになっていった。このように、絨毯はかなり早い段階から世界各地を流通し、消費されたグローバルなモノであり、時代や地域によって異なる機能を担った。このような特色を持つ絨毯は、解読されるべき多くの情報を持っている。すなわち、絨毯を研究することは、絨毯をつくった人々の生活や思想、絨毯をめぐる貿易の実態、絨毯を生産する地の美術伝統、輸入された絨毯の使用法にあらわれる異文化への眼差しなど、絨毯に関連するさまざまな側面について考察する手がかりとなるのである。

アカデミックな研究分野としての絨毯研究は、染織やイスラーム美術史などを専門とする研究者によって、欧米で発達した。1985年以降、現在に至るまで、*Oriental Carpet and Textile Studies* と題する研究論文集が7巻まで出版されており、これまでの研究成果だけでなく、問題関心の変遷や研究手法の多様化の様子も把握することができる。また、絨毯とイスラーム美術に関する雑誌 *Hali* には、絨毯やテキスタイル、イスラーム美術に関する記事のほか、関連分野の展覧会や書籍の案内、サザビーズやクリスティーズなどのオークションでの絨毯の競売情報が掲載されており、絨毯研究の動向や最新の成果を知ることができる。このほか、欧米で出版された絨毯に関する書籍はかなりの数にの

ぼるが、そのなかにはディーラーやコレクター、愛好家などが販売を目的として、あるいは所蔵品の目録を意図して出版したものもあり、学術的ではないことも多いので注意が必要である。

絨毯研究の方法としては、 絵画資料を編年に用いる方法、 絨毯の組織 (織の構造) や材質、染料分析を手掛かりに産地を特定する方法、 財産目録や貿易資料などから産地や流通経路を特定する方法、 現地の美術伝統や工芸品と比較する方法などがある。 の方法で代表的なのは、15世紀から17世紀ごろの西洋絵画に描かれた絨毯の制作年代を、絵画の制作年代から特定しようとするものである。絨毯を描写する絵画によって、絨毯のおおよその制作年代が推測されるだけでなく、西洋にもたらされたあと、どのような環境において使われてきたのかも知ることができる。この方法は絨毯研究のなかでは古い方法であり、画家の名前からとった「ベリーニ絨毯」や「ホルバイン絨毯」、「ロット絨毯」などは、現在でもトルコ絨毯のデザイン・タイプを表す呼称として用いられている。この方法は、絵画の制作年が明らかである場合には、その絨毯の制作年代の下限が分かるために有効である。おもにトルコ絨毯の分類と編年に用いられてきたが、オノ・イーデマは1991年に出版された *Carpets and Their Datings in Netherlandish Paintings 1540-1700* のなかで、この方法を16-17世紀のオランダ絵画に描かれたエジプト、ペルシア、インドの絨毯にも適用した。イーデマは、絵画に描かれる絨毯のモチーフを分類し、データ化して分析することによって、どのタイプが、いつの時代に描かれるかを数量化して、豊富なグラフとともに示した。

つぎに、 の方法であるが、このうち、絨毯の組織と材質から産地を考察することは現在の絨毯研究では必須の要素となっている。この方法を確立するのに重要な役割を担ったのが、著名なイギリス人絨毯研究者のメイ・ピーティアー (1908-1997) である。彼女はもともと細菌学者であり、おなじく細菌学者でバグダードのパスツール研究所の所長だった夫とともに、バグダードに滞在した。現地のバザールでイラン西部から輸入された絨毯に触れる機会を得て、その魅力に取りつかれたピーティアーは、イギリスに帰国後、本格的な絨毯研究を開始し、1960年代には広範囲にわたって中東を旅したほか、70年代にかけてアメリカの絨毯コレクションも訪れて、数多くの絨毯の組織や材質に関するデータを蓄積した。フィールドワークを中心とする長年の研究の結果、科学者であるピーティアーは、従来、デザインな

どを手掛かりに曖昧に分類され、産地が推測されていた絨毯研究に、絨毯の組織、素材と材質を、客観的かつ厳密な基準とする方法を導入した。1972年に出版されたティッセン・ボルネミッサ・コレクションの絨毯カタログで、ピーティアーは各絨毯の組織と材質についての詳しい情報を掲載し、有益なデータを提供している。この伝統は現在にも継承され、欧米の美術館などの絨毯コレクションのカタログには、組織や材質のデータを掲載することが通例となっている。さらに、彼女による1976年の展覧会とそのカタログ *Carpets of Central Persia* は、16-17世紀ペルシアのキルマーン絨毯の組織と材質を明らかにするもので、ピーティアーの研究の有効性を示し、絨毯研究の大きな転換点となった。

素材や染料そのものの分析も重要である。繊維を分析することによって、その繊維がどの動物に由来するかを特定することが可能な場合もある。1997年に出版された、メトロポリタン美術館で行われたインド絨毯の展覧会のカタログ *Flowers Underfoot: Indian Carpets of the Mughal Era* には、12枚のインドとペルシアの絨毯の繊維に対して行われた科学分析の方法と結果がまとめられている。また同書では、藍色や緋色、茜色、黄色や緑色がどのような染料に基づいているのかを解説したあと、14枚のインドとペルシアの絨毯をサンプルとして染料分析を行った結果を掲載している。さらに、2007年に出版された *The Oriental Carpet in Portugal* には、ポルトガルに残る絨毯に対して行われた染料分析の結果が掲載されており、貴重な情報を提供している。このような科学的なデータを積み重ねていくことによって、ある地域の絨毯に用いられている素材や染料の特徴が明らかになるため、こうした情報は非常に有益である。すなわち、繊維や染料に関する情報は、絨毯の産地や年代、さらには流通経路の考察にも手掛かりを与えるのである。

に示した、貿易資料や財産目録を用いる方法は、産地や流通経路の特定に役立つほか、当時の絨毯の価格や価値に関する情報も与えてくれる。たとえば、イスラーム美術史家のマイケル・ロジャースは、各種史料を用いて15-16世紀の地中海圏における中東産の絨毯についての情報を集めようと試み、ルネ・ダンジュー (1409-1480) の財産目録のなかに、マムルーク朝下で作られたと推測される絨毯が2枚あることや、ベリー公ジャン1世 (1340-1416) の財産目録のなかにスペインやトルコで織られたと考えられる絨毯が記録されていることを指摘した。ロジャースによれば、16世紀初めのヴェネチアの記事にも、絨毯は出てくるものの、産地の特定につながるような情報は少ない。また、マムルーク朝の歴史家イブン・イヤース (1448-1524頃) による歴史書『花の驚異』には、豪華な布や敷物が頻出するが、それらが具体的に何を指しているのか、どこで作られたものであるのかを把握するには専門研究が待たれると

指摘している。ロジャースはさらに、トルコの宮廷の財産目録や裁判記録には、16世紀トルコの支配者や有力者たちが使用していた絨毯のタイプや値段に関する豊富な情報が含まれていることを示した。

近年では、2007年にマルコ・スパランザーニによって出版された *Oriental Rugs in Renaissance Florence* が、この研究手法を使った重要な成果である。スパランザーニは、14世紀から16世紀までのフィレンツェの財産目録や積荷証書、手紙など、数多くの各種文書を体系的に分析し、さらにはフィレンツェの画家が描いた絨毯の描写とも照らし合せて、フィレンツェにおいて、どのようなタイプの中東の絨毯が求められ、輸入され、流通したのかを、絨毯の価格や大きさ、使用方法とともに明らかにした。この本には、各種文書の内容と、フィレンツェ絵画における絨毯の描写のカラー図版も掲載されており、絨毯研究や美術史学のみならず、さまざまな分野の研究者に有益な資料を提供している。

に挙げた、絨毯と、ある特定の場所の美術作品や工芸品を比較する方法も有効である。たとえば、ボストン美術館には非常に密に織られた上質のインド絨毯があり (図1、図2)、そのフィールド (絨毯の中央部分) の上部には宮廷



図1 絨毯、北インド (ムガル朝) 1590-1600年頃、ボストン美術館 (Gift of Mrs. Frederick L. Ames, in the name of Frederick L. Ames, 93.1480) Photograph © 2012 Museum of Fine Arts, Boston.

で生活する人々が配置され、中央部分には狩で仕留めたチーターを2頭の牛が引く荷車に乗せて操る御者や、逃げまどう鹿を睨む獅子が表されている。さらに下部には、7頭の象を捕まえたガジャシンハ（インドの聖獣）を攻撃するシームルグ（ペルシアの霊鳥）の様子が絵画のように細かく織り出されている。ダニエル・ウォーカーがすでに明らかにしたように、1590年頃にムガル朝の宮廷工房で描かれた『アクバル・ナーマ』の挿絵には、同様の牛の引く荷車を用いた狩の場面があることや、17世紀初めのムガル絵画に、7匹の象を捕えたガジャシンハを攻撃するシームルグを描いた、類似する構図のものがあることから、この絨毯はムガル朝宮廷用に16世紀末から17世紀初頭に作られたと推測されている。絨毯には制作年や産地の情報が織り込まれることが少ないので、このように、絨毯に表れるデザインやモチーフと、年代や産地の判明している絵画や工芸品を照らし合せていく作業が不可欠である。

以上、絨毯研究の方法のうち、主要な4種について具体的に述べた。そこでも明らかかなように、絨毯研究はさまざまな専門分野に開かれており、美術史家、染織研究者、化学分析の専門家、歴史家や経済史家など、各専門分野の研究者たちが協力してデータを蓄積したり、分析することで、飛躍的な研究成果が期待できる分野である。複数の分野の研究者たちが集まって絨毯研究に関する知見を交換する試みとして、2003年にオクスフォード大学のアシュモリアン美術館で国際シンポジウム、「1400 - 1700年ごろのイラン世界における絨毯とテキスタイル」が行われた。その成果は2010年に論文集 *Carpets and Textiles in the Iranian World 1400 - 1700* として出版され、13名の絨毯研究者や染織研究者、イスラーム美術史家、歴史家が、ペルシアの絨毯やテキスタイルに関して、その歴史や様式、技法の特徴のみならず、貿易の実態や流通経路、輸出先での機能などについて論考を寄せている。絨毯は、織られた場所で日用品や商品として使われるだけでなく、ヨーロッパやアジアに貿易品として流通したり、一部は美術品として扱われるなど、時代と状況によって多様な機能と意味合いが付されてきた。そのような絨毯には、いろいろな未解読の情報が込められており、これを経済学や歴史学などを専門とする研究者と、美術史・染織学・化学分析などを専門とする研究者が協力し合って解読していくことによって、絨毯研究にはさまざまな分野に貢献しうる可能性があるといえよう。

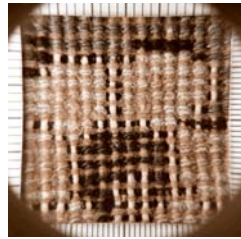


図2 裏面細部（筆者撮影）
Photograph © 2012 Museum of Fine Arts, Boston.

（早稲田大学高等研究所助教）

東洋学研究情報センター運営委員会委員
(2012年度)

所外委員

大西 克也 大学院人文社会系研究科・文学部准教授
村田雄二郎 大学院総合文化研究科・教養学部教授
加藤 博 一橋大学大学院経済学研究科特任教授
小長谷有紀 人間文化研究機構・
国立民族学博物館民族社会研究部教授
岩井 茂樹 京都大学人文科学研究所人文研究部教授
宮治 昭 龍谷大学文学部教授
宮嶋 博史 成均館大学東アジア学院（韓国ソウル）教授
柳澤 悠 東京大学名誉教授

所内委員

大木 康 教授 東アジア研究部門（第二）
（兼）センター比較文献資料学
園田 茂人 教授 新世代アジア研究部門
（兼）センターアジア社会・情報
池本 幸生 教授 汎アジア研究部門

（オブザーバー）

榊屋 友子 教授 西アジア研究部門
（兼）センター造形資料学
松田 康博 教授 汎アジア研究部門
（兼）センターアジア社会・情報
板倉 聖哲 准教授 東アジア研究部門（第二）
（兼）センター造形資料学
名和 克郎 准教授 汎アジア研究部門
（兼）センター比較文献資料学

センタースタッフ

大木 康（おおき やすし）センター長 センター
比較文献資料学分野 中国文学
園田 茂人（そのだ しげと）副センター長 センター
アジア社会・情報分野教授 比較社会学
榊屋 友子（ますや ともこ）センター造形資料学分野
教授 イスラーム美術史
松田 康博（まつだ やすひろ）センターアジア社会・
情報分野教授 アジア政治外交史
板倉 聖哲（いたくら まさあき）センター造形資料
学分野准教授 東アジア絵画史
名和 克郎（なわ かつお）センター比較文献資料学
分野准教授 文化人類学

センター便り

・平成24年度漢籍整理長期研修

昭和55年度、センターの前身である東洋学文献センターから実施してきた漢籍整理長期研修は、今年で33回目となった。前期平成24年6月4日から8日まで、後期は平成24年9月3日から7日までの計2週間。参加者は、大学図書館等の職員8名と院生1名であった。受講後それぞれの所属機関で、研修の成果を活用している。講師として、東洋文化研究所のスタッフに加えて、所外9名の専門家に協力いただいた。この場をかりて厚くお礼申し上げたい。今後も実施していく計画である。

明日の東洋学

東京大学東洋文化研究所附属東洋学
研究情報センター報 第28号

発行日 2012年10月31日
編集・発行 東京大学東洋文化研究所
附属東洋学研究情報センター
〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番地1号
電話 03-5841-5839（直通）
FAX 03-5841-5898
E-mail ricas@ioc.u-tokyo.ac.jp
URL http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp

デザイン コスギ・ヤヅ / 印刷（株）ヒライ